

CSRと経済情報

國部 克彦 (こくぶ かつひこ)

神戸大学大学院経営学研究科 教授

CSRといえば、環境や雇用、人権などの社会的責任がすぐに連想されるが、CSRの基本的なコンセプトのひとつである「トリプルボトムライン」とは、経済・環境・社会の3つの調和の取れた発展を意味する。英語で、「ボトムライン」とは会計計算書の最終行、つまり利益のことであり、トリプルボトムラインとは経済だけを反映したのではなく、環境や社会面も反映した「三重の利益」という意味になる。

「三重の利益」とは、「三種類の利益」ということではなく、あくまでひとつの数字の中に、経済・環境・社会の3つの要素が反映されていることを含意している。トリプルボトムラインというコンセプトは、世界的なCSRのオピニオンリーダーであるJ.エルキントンによって「サステナビリティ」の定義として1990年代後半に提唱されたもので、2000年に発行されたGRI (Global Reporting Initiative) の「サステナビリティ報告ガイドライン」の中心概念として採用され、今日に至っている。

GRIが定めるサステナビリティ報告ガイドラインは、民間ベースのCSR報告書の基準で法的な拘束力は無いものの、国際的には最も普及しているガイドラインである。そこでの報告内容が経済、環境、社会に区分されているのは、「トリプルボトムライン」の影響である。

しかし、GRIガイドラインにおける経済情報は、環境や社会の指標に比べて、特段充実しているわけでもない。「トリプルボトムライ

ン」の創始者であるエルキントンの著作を調べてみても、「三重の利益」の計算方法はどこにも記載されておらず、「トリプルボトムライン」は具体的な「利益」概念ではなく、CSRを行ううえでの企業の方向性を規定する抽象的な概念であることが分かる。

ただし、GRIガイドラインに「トリプルボトムライン」に近い概念が無いわけでない。それは、経済パフォーマンス指標の中核指標の筆頭に挙げられているもので、「収益、事業コスト、従業員の給料、寄付及びその他のコミュニティへの投資、内部留保、および資本提供者や政府に対する支払いなど、創出及び分配した直接的な経済価値」と記されている。

通常の利益計算では、企業は株主のものという判断から、労働者への支出は「費用」で、株主への支出は「利益」の分配ということになるが、CSRの世界ではステークホルダーの間を「差別」することなく、企業が創出した価値（付加価値）とその分配を情報開示するようにGRIガイドラインは求めている。このような計算方法は、究極的には企業の目標を左右する重要な論点を含んでいる。すなわち、株主のための利益（純利益）を追求するのか、給料や税金、寄付なども含めた広義の利益（付加価値）を追求するのかは、企業の根幹に関わる問題だからである。

現時点では、CSRと経済情報はこのような根本的な問題にまで到達していないが、CSR経営が深化するにつれていずれは直面する課題であると思われる。